

大物加工分野など、中国で採用高まるカトウタッパー 「1月も中華系ユーザー深耕に向け、商社と同行PR」

玉置部長、志原営業スタッフに聞く「新春話題」 — カトウ工機 —

昨年11月末に移転したカトウ工機関西営業所を1月下旬に訪問し、玉置営業部長、志原営業スタッフに面談。新春話題を提供してもらった。

中国ローカル企業の加工レベルの向上に伴い、カトウ工機に対するオファーが高まってきている。

「中華系ユーザーへの深耕を進めるべく、商社との同行PRを終え帰国したところ。風力発電関係などの大物加工分野で、BT50番の機械を中心に弊社のタッパーの採用が増えてきた。中国製の品質の高まりを実感する一方、中国企業による東南アジアに対する工場進出が計画されるなど、新たな需要の高まりにも目が離せない。」

カトウ工機の輸出の8割は中国で占める。「2020年のコロナ禍以降、中国では数多くのマシニングセンターが誕生し、そのスピード感を目を見張るばかりだそうだ。2025年を振り返ってもうと「大口案件が少なかった」そうだが「2026年、国内は機械設備の更新需要の波に乗ってほしい。そのための政府の後押しも期待し

ている」と語る。移転した関西営業所は、JR地下鉄新長田駅から徒歩10分。カトウタッパーのノウハウを活かしたバリ取りホルダのさらなる浸透を目指し、ロボット仕様のテストカットに対応が図れる体制を整えたことも付記したい。

担当する志原営業スタッフは、ロボットの常設は平塚本社、中部営業所に続く、3拠点目。バリ取りホルダは、受注までに時間を要するが、購入の前撮となるのがテストカット。顧客との信頼関係強化に繋がるばかりか、トライアルを通じ、(バリ取りの)ノウハウ蓄積にもなる」とアピール。5月のGW明けをめぐり、本格的な体制を敷いていく計画だという。

**関西営業所は
JR・地下鉄
新長田駅から
徒歩10分**

「5月GW明けめに本格的に対応へ」
移転した関西営業所では、バリ取りホルダのテストカット体制も



テストカットを担当する志原営業スタッフ。5月から本格的な運用を開始する

ロボットを活用した バリ取りホルダの 広がりに期待

マシニングセンター用
バリ取りホルダ
DBR7-SC

KATO

バリ取り、自動化。

さまざまなワークにこれ一本

品質の安定
人手不足の解消

防塵機構

10mmの縮み

- ・フローティングでワーク形状にならう
- ・磨りすぎず均一なバリ取りが可能
- ・プログラム作成が楽
- ・縮み量が変化しても磨り量が変わりにくい

4段階切り替え
ワークに合わせて楽に
フローティング力の設定を変えられる

バリ取り例

1	C0.4
2	C0.5
3	C0.6
4	C0.7

紹介動画
こちら→

加工条件
FCD400
5,000(mm/min)
1,500(mm/min)
粗硬ロータリーバー